



住民自治と団体自治の両輪を意識して

中川 幾郎 さん（帝塚山大学名誉教授）

名張は、自主・自立の地域づくりのトップランナーとして、全国のモデルとなってきました。そして今、団塊世代の転入で人口が急増したまちが高齢社会に突入。ちょうど曲がり角に差し掛かっています。

こうした中、「住民自治」と「団体自治」という地方自治の両輪を改めて意識する必要があります。福祉・防災など住民自治がしっかりするほど、行政すなわち団体自治は業務の効率化を図れますし、より高度な対応に特化していくことができます。

もちろん、地域づくり組織は決して行政の下請けではありません。住民自治を实践する場であり、権利です。権利と裏腹に義務も含んでいるわけですが、行政と住民の双方がその認識を深める必要があります。

人口が減少し、負担を分担する時代に

岩崎 恭典 さん（四日市大学名誉教授）

名張は合併の住民投票で単独市を選択。その後、どんな市の仕事地域へ移っていきますが、「私たちが単独市を選択したから」という意識で取り組まれているように感じます。

人口減少時代において、企業は労働力の確保に向かい、地域のために活動する人はますます少なくなっていくと見えます。無償ボランティアでは難しいので、地域でビジネスを起こせる体制が求められますし、地域のいろいろな団体や活動を横断的に組み合わせる手法も必要とされます。

負担を分担する時代とも言え、地域を構成する人や団体が「当事者」であることを意識できるかが重要なカギ。子どもや孫のために何ができるか。地域が未来をあきらめず取り組んでいく必要があります。



行政と地域の役割分担を考えて

名和田 是彦 さん（コミュニティ政策学会 会長／法政大学教授）

全国的にみて名張市は都市内分権が進んでいます。例えば、市民センターを地域づくりの拠点とすることは重要なことですが、その実現に苦労している自治体も多いのが実情です。

一方で、名張市からの交付金を基に住民がボランティアで取り組んでいるのが現状で、有償ボランティアの仕組みなど工夫が必要かと思われます。また、地域づくり組織の規模感で活動が進むと、多くの住民はその活動をお任せしてしまう傾向があり、より身近な地域での活動も大切にする必要があります。

行政は、どこまで地域に任せていくのかを確定していかないと、地域が頑張るほどに、ずるずるとその役割が増えていく。行政・地域の役割分担を考えていくことが求められます。



コミュニティ政策学会「名張大会」

共催：名張市（なばり流まちづくり講演会）

なばり流まちづくりの行方

地域づくりのあり方について考える「コミュニティ政策学会」が7月6日・7日に、adsホールと名張市民センターで開催され、のべ約400人が参加。全国から有識者や地域の実践者が名張に集い、議論を交わしました。

名張市では、地域予算制度（使い道が自由な地域への交付金）を活用した住民主体のまちづくりを平成15年度にスタート。制度の改訂・更新を図りながら進化させ、20年間に

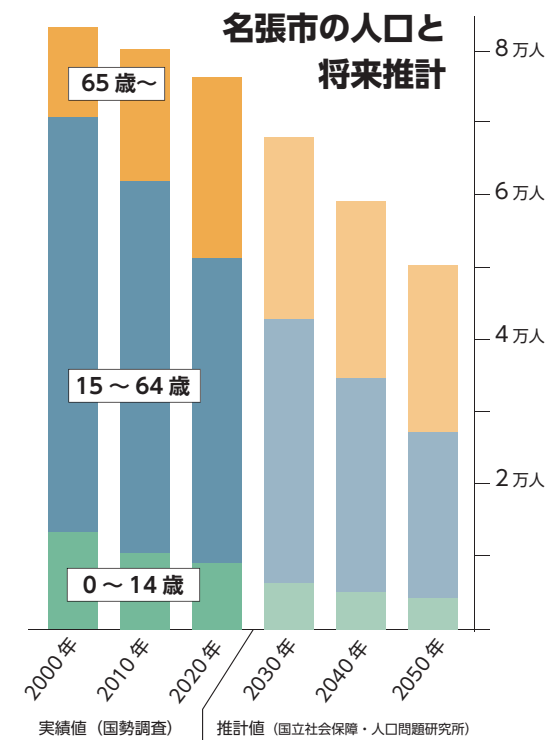
わたり15地域において先進的な取組が多数生まれています。一方、地域の担い手の高齢化や人口減少が進む中、従来のやり方では活動を維持することが難しくなっているのも実情です。

今号は、コミュニティ政策学会の冒頭に開催されたシンポジウム「人口減少下における持続可能なコミュニティ政策のあり方」において、名張の事例を踏まえながら話し合われた要旨をご紹介します。

図 協働のまちづくり推進室 63・7484



市内では、防災訓練やコミュニティバスの運行、地域活性化など住民主体の特色ある活動が繰り広げられています。



昭和45年以降急増していた名張市の人口は、2000（平成12）年をピークに縮小。地域においては活動の中心を担っていた団塊世代の高齢化に伴い、担い手不足が顕著化していきます。

コミュニティのあり方を問い直す時期



地域づくり代表者会議 会長
時枝 民生 さん

現在の地域づくり組織ができた20年ほど前は、関西で働いていて定年を迎えるような人が大勢いました。これまで名張の地域づくりは、「定年後は地域に貢献しよう」という人たちに支えられてきたのです。

183もの区や自治会を15地域にまとめ、数々の補助金を一括交付金化し、地域ビジョンの策定、公民館の「市民センター化」と、長い間、住民と市が話し合いを続けて現在の姿ができてきました。「住民主体」を支えてきた先輩たちのおかげで、「行政に頼り過ぎずに、自分たちで一生懸命やっていく」ことが定着してきたんだろうと思います。

最大の課題は、高齢化が進み、地域の担い手不足が顕著になってきたこと。今後は、地域同士

の広域連携も必要とされていくでしょう。そうした中、区や自治会単位では「役員になるんだったら加入しない」という流れも生まれつつあります。「そのような活動なら、してもらわなくてもよい」と、必要とされる活動の範囲が縮小しているのかもしれません。

隣近所の助け合いが特に求められるのは、防災など安全に関すること、そして、増加傾向にあるひとり暮らし高齢者の見守りであると考えます。ただし、人口が減少し、年齢構成も変わってきた中、地域の課題解決に向けて、行政や住民は何をすべきか、どのように連携していくのか、また、コミュニティのあり方・作り方について、改めて問い直していく時期に来ているのではないのでしょうか。

地域づくり組織が歩んできた4つのステージ

第1ステージ

交付金化



「名張市ゆめづくり地域交付金の交付に関する条例」を制定（平成15年）

→ 小学校圏域に1つずつの包括的住民自治組織「地域づくり組織」を設置し、各種補助金を「ゆめづくり地域交付金」として一本化。ハード・ソフトを問わず使い道は自由で、特色ある地域づくり組織の活動を支援

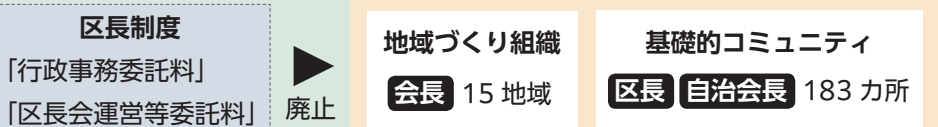
第2ステージ

組織見直し



昭和30年代から始まった「区長制度」を廃止（平成21年）

→ 地域づくり組織条例を制定し、区・自治会である「基礎的コミュニティ」と、それを包含する小学校区を単位とする「地域づくり組織」に整理



第3ステージ

地域ビジョン策定



→ 15地域が個性ある将来のまちづくりのための基本方針、将来像、それに基づく実施計画を策定（平成24年に全地域で策定）。市の総合計画の地域別計画にも位置付け

第4ステージ

市民センター化



→ 公民館を市民センターに統一し、生涯学習機能に地域づくり活動、地域福祉活動の拠点としての機能を追加（平成28年）

若い世代の思いを大切にしていきたい



名張市長
北川 裕之

平成12年をピークに名張の人口は減少に転じ、大きな転換期を迎えたのは、亀井前市長が就任された20年ほど前。財政の厳しさが表面化しました。

その主な要因として、爆発的な人口増に伴い都市環境整備を進めてきた結果、借金が膨らんでいったことが挙げられます。そして、平成の大合併で、住民投票により単独市を選択。合併特例債などの財源確保ができず、国の交付金なども十分でなくなるといったことが財政難に拍車をかけていきました。

そうした中、名張市は、地域に一定の予算を配分して必要な課題解決に使っていただく都市内分権を推進。財政難というピンチをチャンスに変えた大きな出来事だったと言えます。

私は、2年前に市長に就任。

総合計画に「シティブロモーション」の考え方を取り入れ、たくさんの人に名張を好きになってもらうことで、まちを生きづける取組を進めています。この一環でブランドロゴ（なんとかなるなる。なばりです。）も若い世代の皆さんと作りました。

ロゴに込められているのは、「不安や悩みがあっても、名張の人はつながりが強く温かく助けてくれる、そんな中から夢や希望を叶えていける。それが名張の魅力だ」という思い。この20年間のまちづくりの結晶が若い世代に浸透していただければ。そして、この若者たちが20年、30年先の名張を背負っていくのだと心強く感じます。こうした若い人たちの思いを大切に、足腰の強い地域づくりを進めていきたいと思っています。

名張市の「目指す10年後の姿」

総合計画「なばり新時代戦略」基本構想より

変化をおこし 活力あふれ

みんなでつくる 大好きなまち なばり

社会をはじめ、様々なことは時代とともに変化しています。



そういった変化に対応することはもちろん

んのこと、これからは、市民自らが変化をおこすこと、挑戦することを目指します。

そうすることで、活力あふれるまちをつくり、みんなでつくるまちは、大好きなまちになっている。

名張が大好きなひとたちであふれる。

そして、名張に愛着を持ち、まちの将来に主体的に関わる協力者で更にまちに活力があふれる。

10年後にそのような名張市を目指します。



総合計画は、将来どのようなまちにしていくのかの道しるべであり、まちづくりの基本となる計画です。

若者が地域に関わるためのポイント

将来、地域で活動する際に「久しぶり」と言い合える関係をつくっておきたいと思い、1年かけて青年部を発足。その中で、若い人に地域へ関わりを持ってもらうために大切なことは何かを考えました。

まずは、やる気のある人を見つけること。手あたり次第声をかけても難しいので、自分自身と既につながっている人の範囲で声をかけてみて。私の場合は、消防団のメンバーでした。そして、活動の意義や将来像を言語化することなども重要です。

地域では、若者が点在して活動していますが、線にして面にすることで、地域がもっと盛り上がるはず。かといって、新たに若い担い手が出てきたら、あれこれ頼りにしてしまいがち。「どんなことをしたいか」を確認して応援するスタンスがいいのではないかと思います。



川西・梅が丘地域づくり協議会 青年部代表
数本 優 さん

（学会の分科会「新たな担い手の確保に向けた取組」で登壇）